



アートと 呼べる 匠の技



La Lettre

— DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo —



笹川日仏財団
ニュースレター
Vol. 3 No. 2

フランスといえばパリ、パリといえ
ばモード。世界のモードを常にリード
してきたパリの舞台裏にスポットをあ
てた展覧会『パリ・モードの舞台裏』
が、東京渋谷の

Bunkamura
ザ・ミュージアムで
開かれた(四月三十
日・六月六日)早い
ものだが、この展覧
会は「日本に
おけるフランス年」の
フィナーレを飾るイ
ベントである。

フランスを象徴す
る華やかなモード界
を支えるのは、実は
匠たち。いつもは裏
方として影で支える
アトリエの匠たちだ
が、今回はその仕事
ぶりが主役。羽飾り、
造花、刺繍、レース
などその技術の一つ一つが十五のアトリ
エを模した部屋に展示された。会場は
平日にもかかわらず服飾専門学校
学生などの団体客も多く、女性客を



中心にかなり混みあっていた。
匠たちの手仕事と伝統ある技術は、
そのどれもが、気の遠くなりそうな
緻密さからくる美しさだ。たとえば刺
繍のアトリエでは、

サンローラン⁸⁸春
夏オートク
チュールコレク
ションに発表した
「ゴッホ」という
タイトルのひまわ
りのデザインの上
着の完成品とそ
の横に制作途中
の上着が並ぶ。また
ルイ・ヴィトンで
は現在人気のパス
テルカラーの美し
いかクテルバック
の制作工程が順を
追って展示。いず
れもその成立がよ
く理解できるだけ
に、時間をかけてでしか完成をみない
手仕事の持つ深さと重みを知らされ
る。

展示の後半にはティオール、シャネル

ゴルチェ、ジバンシイなどそうとうた
るオートクチュールやプレタポルテの
作品、約百七十点が所狭しと並んだ。
特にこれだけ多くのオートクチュール
の作品が並ぶことは珍しい。壮観の一
言。そしてこれらが決してショーだけ
のためでなく、実際に着れる社交の場
があるからこそつくられ、だからこそ
技術も保持している。その生活の豊か
さの違いを目のあたりにさせられる。
また若手デザイナーによる帽子など
も展示。手作りと工業的生産技術の
両者を使いこなして新時代を築こうと
する未来に向けての力強さも垣間見せ
た。

単にモードといっても、その裏に
あるフランスの底力とでもいうべき背
景を知る展覧
会となった。
匠たちの仕事
は、もはやア
ートとも呼べ
る迫力をもっ
て迫ってくる
のだから。



京都発 コンテンポラリー・ダンス

フランスを中心に南アフリカや日本のパフォーミングアーティストたちが文化の違いを乗り越えて出会っていく国際的パフォーマンス・フェスティバル

「京都の暑い夏'99」が「京都の暑い夏事務局」主催で、5月3日から6月19日まで京都市内の各所で行なわれた。その中でも人気殺到のいくつかのクラスを覗いてみた。



新緑の五月は初夏を思わせる日差しだ。京都の夏は暑い。その暑さをさらにヒートアップするコンテンポラリー・ダンスの国際的ワークショップ・フェスティバルが今年も開かれた。特に今年は京都市運営による「芸術祭典・京」の舞台芸術部門との関連企画として組み込まれたことで、より多くの観客を集めることとなったのである。もともこの企画は、京都在住のダンサーや振付家などによるグループ・プロジェクト・プロジェクトが母体となり、彼らとフランスなどの作家たちとの交流に端を発している。出会いから五年、三年前には「京都の暑い夏事務局」を開設し、フェスティバルとして毎年定期開催を実現させてきた。その活動が京都市に認められ、演劇を中心とするプログラムに新たにコンテンポラリー・ダンスを核とする特集が組まれたのである。

特に芸術祭と並行して行なわれたことで規模だけでなく視点を交えた企画内容など例年にならぬ人気のプログラムとなった。その結果、メインのワークショップの参加者は延べ五百人にのぼる盛況ぶり。昨年（の四百十三人）を大幅に越えることができた。またレッスン期間は二週間に及ぶ毎日のものもあつたが、中でも南アフリカ出身のヴィンセント・セクワティ・マントソーのレッスンは日を追うごとに人数が増し、ついに最後には彼のカンパニーに一年間招聘されるダンサーが一人出るという成果まで現われた。

「ロリータ・プロジェクト」の地道な活動が実を結び始めた。プログラムは、フランス現代ダンスの潮流を作ってきたカンパニー・ファトゥミ・ラムル、ダンサーでありバリ・オペラ座で振付をする作家ミッシェル・ケレメニスや国際的ダンス・コンクールで数々の賞を受賞しているヴィンセント・セクワティ・マントソー、国際的にも評価の高まっているヤザキ・タケシなどのダンス公演と彼らによるワークショップだ。特に今回の特徴として、彼ら一流のダンサーたちがコラボレーションを発表する際のリハーサルに参加できるオープンレッスンなども同時開催され多岐にわたったのである。またフランスではダンス界のみならず音楽や演劇のアーティストにとってもバイオニオ的存在、ヴェロニク・ラルシエのワークショップも開かれた。

「RELAX & BREATHE」ヴェロニクの声が響く。二人づつペアを組み体の力を抜き、リラクセスさせ、いかに相手に体を委ねていくかがポイントだ。慣れてくると自然に体の部分部分が引きずられるように動きだす。決して自分で意識して動かす方法ではない。理解が深まっている。

そこで、今回の企画の中心ともいえる人気のワークショップはダンスを経験者各二十人前後の定員で全八クラス、まずヴェロニク・ラルシエのレッスンを、朝一番で受けた。

人間の骨格や筋肉の構造を把握した上でレッスンは九五年に初来日以来、日本でも年々

柔軟体操とは異なる動かし方である。「ストレッチでも骨格に正しいやり方があるのです。従来は無理を強いて型にこだわったやり方でした。体を動かすこと自体が喜びに変わらなければ嘘です」指導を受けた後のメンバーの動きは皆のびのびとし、見ている側にもその気持ち良さが伝わるレッスンだった。

最初のヤザキタケシのレッスンは体の一ヶ所を点としてとらえその点を意識して体を動かすことに終始。感じたままに動く訓練がなされる。そして最後は全員がそれぞれ思うままに今度は空間の点を結ぶように音楽に合わせて動き続ける。見る側にはすでに踊っているかと思えない動きである。

2時間半ノンストップ。飛び散る汗、最後会場は一つに

十分近くソコ感覚でそれぞれが動くが、見学していたヴィンセントが、思わず立ち上がり一緒に踊りだし、中の一人と自然にからんで踊りだすというハプニングも登場。自然派生的に生まれた二人の動きはその時々で彫像のように美しくさまざまに変化していった。それを反映してか、会場の空気が一変。どんな集中していくのが手に取るようにわかった。



「このレッスンを通して、何か一つでもいい。今まで自分でも知らなかつた動きの発見をしてもらえれば僕はうれしいです。必ずその人に即した、その人なりの動きがあるのですから。」

「DON'T THINK」 「テクニクを窓のむこうにほおって単純に踊らばいいのさ」 時にルイ・アームストロングの真似をして歌いだしたり、吠えるように唄いながら拍子をとったり。年寄りパイプを吸うような滑稽なしくさの振付けのステップにしたり。疲れを知らないヴィンセント。レッスン終盤には、強制的にギャラリイもハミングで参加させられて大いに盛り上がり、会場は一つになった。

「ダンスにはダンスにしかない感動が必ずある」 フランスでは職業として成立しているダンサー。しかし日本では職業どころかダンスに持たれる興味でさえ全体のごく一部としかいえない。その現実の中でこのようなフェスティバルを開催できたことの意味は大きい。

「更によいレッスンを受けたら」という人々の意識の高まりを年々感じます。日本人とはまったく違うダンスに出会うことは、自身の欲求でもある。型ではなく体のことを考えるようになってきた実感があるのです。更に最近では、このフェスティバルがダンサーに限らずに多くの人にも身体に対する興味を引き出す機会にもなるのだと思うようになりまし



A propos de nos projets...

最近の事業から

映画発祥の地フランスで、「日本の実験映画」に寄せられる関心

今年の春、フランスで時を同じくして当財団助成事業の対象となった日本の実験映画の二つの催しが行なわれた。

ストーリー性のある商業映画と異なり、実験映画は難解なイメージが拭いきれないため日本人には馴染みが薄い。ところが実験映画を含む世界の映画祭で、日本の実験映画は高い評価を受けている。

特にフランスにおける日本の実験映画に対する関心は私たちが想像する以上に高いのである。

その催しの一つは、5月に国立ジユ・ドゥ・ボム・ギャラリーで開催された日本の実験映画の草分け的存在であり、世界的な賞を数々受賞している飯村隆彦氏の「飯村隆彦映像回顧展」である。

ここではオノ・ヨーコ、土方巽、アンディ・ウォホルなど世界的なアーティストたちと共同制作したハミリ、十六ミリフィルムや



飯村隆彦「あいうえおん六面相」



ビデオなどこれまでの六十本もの作品が一挙公開された。この国立ギャラリーは、九一年の開館以来アメリカのジョナス・メカスなど前衛作家や先鋭な企画による展覧会が開かれることで有名だが、日本人の映像作家として初の回顧展となった。「具体展」も並行して開催され連日の賑わいをみせた。

また同時に日本パリ文化会館は飯村氏の講演会が行なわれたが、立ち見が出る盛況ぶり。それも観客の八割方がフランス人で、日本の実験映画に多大な影響を与えた「陰陽」思想の説明に多くの関心が寄せられた。彼のこのような活躍は、彼に続く日本の映像作家たちに指し示す一つの道ともなる。

もう一つの催しは、今回で三回目を迎えた「日本の実験映画の

フランス上映」だ。三月に日本の実験映画第二世代の代表的存在である奥山順一氏の作品の他、若手作家のフィルムなど二十六本がフランスで初めて本格的に紹介。観客動員千名と過去最大規模となり成功を収めた。

パリの会場では奥山氏が登場。パフォーマンスも披露して集まった約七十人の観客の大爆笑と鳴り止まない拍手を受けていた。会場にいるとその熱気に映像の可能性を痛感させられる。

たとえば、主催者で作家の太田曜氏の作品『FLOTTE』などは、まるで観ている自分が人間以外の地球外生物にでもなったような錯覚を起こさせる。常に何かを捜すように執拗にひた走るカメラの視線、スピードが上がると共に徐々にカメラと自分が一体化していくのだ。感情だけは確かにあっても、息づく体温はない。無気質な肌感覚。そんなさまざまな想像をかきたてさせられるのである。

また一言も言葉はないが、能弁に話す映像の、DISTORTED

「TELEVISION」など、劇場映画のようにセリフで気持ち伝えるわけでもなければ状況説明もない。答えは一つではなく、観た人々の数だけあるのである。いずれも三分から十五分程度の作品を約十作品上映したが、どの会場でも質疑応答がさかんにおこなわれた。その多くが作品手法やコンセプトを聞くもので、作品をいかに理解すれば良いのかという日本人の質問とは大きな違いを見せていた。



これらの催しは、日本の実験映画を観たフランスの関係者が興味を示し、次に繋げるといった形でネットワークが広がり実現した企画である。「日本の実験映画のフランス上映」では、首都だけでなくストラスブールなどの地方都市の上映まで誕生させた。

プロジェクト・カレンダー

99年7月～9月

- 7月1日～7月31日
 - 《HEC経営大学院学生 日本語研修旅行》
 - 《フランス人学生7名の 語学研修と企業訪問》
- 7月26日
 - 《日仏パネルディスカッション》
 - 《日仏投資協力の新時代 「対日投資の魅力」》
- 7月29日～8月13日
 - 《「ミュージックリエーション 夏期アトリエ」
 - 《パリでのコンピュータ音楽研修と作品制作》
- 8月25日～8月31日
 - 《日仏メディア交流協会／於パリ》
 - 《「チェロを弾く女」東京公演》
 - 《「仏のブラックユーモア劇を日本人女優が演じる」》
 - 《「イ・フオウシ・シアター」於東京》

Petite note

編集後記

「フランスにおける日本人」「日本におけるフランス年」と2年続いた日仏のイベントも終わり。「自由の女神」は帰国しましたが、「この間生まれた感動や友情はいつまでも残ってほしいものです。」

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

La Lettre

1999年6月発行 Vol. 3 No. 2
 発行人：富永 重厚
 編集人：関 晃典
 発行：笹川日仏財団
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12
 TEL：03 (3769) 6252
 FAX：03 (3769) 2090
 E-mail：matsugam@spf.or.jp
 http://www.spf.org/ffjs/